

歌人上田三四二、「たまものとしての四十代」

大町公

要 旨

上田三四二は医者であり、戦後を代表する歌人の一人でもあった。彼は四十二歳の時、結腸ガンを病み、手術のため入院した。昭和四十一年のことで、まだガンが近い将来の死を意味する時代であった。彼も一時は死を覚悟したが、手術は成功し、幸運にも生き延びることができた。エッセーの題が示すように、彼にとってはまさに「たまものとしての四十代」であった。

しかし、ガンはいつ再発するかもしれない。そのような恐れの下で、彼はどのように生きようとしたのか。彼を再び生の世界へと導いたのは、兼好の「時間論」と、上田自身の自然への著しい傾斜であった。拙論では、兼好の「俗と無常—徒然草の世界」と『うつしみ この内なる自然』、ガンを患って以降、四十代全体にわたる歌集『湧井』等を検討することにより、四十代に得た彼の死生観を見て行きたい。

はじめに

以前、筆者は、西川喜作、原崎百子、千葉敦子三人のガン「闘病記」を取り上げ、拙論をものしたことがある¹⁾。印象に残った作品を集めただけのだが、うかつにも書き終えるまで、彼らがいずれも四十代で

あることに気がつかなかった。四十代では仕事がいまだ半ばである、子供が成人していないなどの理由で、人生に強い強い執着がある分、「闘病記」はそれだけドラマチックな展開をする。それが読む者を惹きつけるのであろう。これから取り上げる医者にして歌人、上田三四二もまた四十代でガンとの闘いを強いられた。昭和五十年、彼は四十四年より八年半の歌九百首足らずをまとめ、歌集『湧井』²⁾を出版した。四十代のほとんど、より詳しくは入院以後四十代のすべての歌が含まれる。その付録として付されたのがエッセー、「たまものとしての四十代」³⁾である。拙論では、本歌集を検討するのはもちろんだが、先ずこのエッセーを手がかりに、闘病生活がいかにして始まったかを見て行くことにしよう。

一、「先途なき生」

上田は昭和四十一年、結腸ガンのため入院した。四十二歳の言わば働き盛りであった。当時、上田は国立療養所東京病院に勤務していたが、年明け早々より約二カ月、他の国立療養所の手伝いを名目に、佐渡に過ごした。前歌集『雉』出版のあと、歌風の展開を求めてのことであったが、ちょうどその頃、便に異常のあることに気づいた。「医者にもあるまじき臆病な心根から、目をつぶってやり過ごしてきた。」

三月三日、東京の癌研究所を訪れたが、胃潰瘍の診断を受ける。回復の兆しがなく、五月二十一日再び癌研究所を訪ね、「横行結腸が下行結腸に移る、その起始部のところに著しい狭窄」があると思われる。診察した医師の「切りますか。」の言葉に、ガンであることを了解する。「意外な、信じがたいことが起きてしまったことに動揺しながら、選ばされてしまったその運命を否定するどんな根拠も見当らなかった。電車の中でも、食堂でも、相客が急速に背景に退き、私の足は宙に浮いて、いわば外界は私の前から消えていた。」⁵⁵

当時はまだガン＝死を意味した時代であった。医者の上田にすら正式な病名はついに知らされなかつたくらいである。

入院までの一週間、上田は「窓に向かって据えた小机の前に膝を揃えて、沈鬱に頭を垂れていた。」「そうだったのか、やっぱり、そうだったのか。そんな言葉が「胸の底からおのずから湧いて出た。」「信じられない気持ちの中から、否応なしに恐ろしい真実の競り上がってくる呻き」であった。

その辺りの歌をいくつか紹介しよう。

告げられて顔より汗の噴きいづとおもふそれより動悸しており

(五月二十一日以後)

壮年のわがうつしは若やぎつついづよりぞ死を育みぬしは
たすからぬ病と知りしひと夜経てわれよりも妻の十年老いたり
本読みてこころ鎮めんと直居れどいつしか膝がふるへてをり
動揺ののちにしづまるこころなら夜は安らげく眠らんものを
何も知らぬ子が甘えよるいひがたくそのやはらかき髪もてあそぶ
死はそこに抗ひがたく立つゆゑに生きてゐる一日一日はいづみ
教科書にはなき幸運の除外例あるいは良性のものかも知れぬ
あかつきの目覚めは汗をとまひて感情は夢のなかも波立ちぬ

五月下旬、癌研究所附属病院外科に入院。六月初旬、手術。月末に退院。その頃の歌には次のようなものがある。

このいのちまなく消ゆるといふことも人のうへのごとく思ふときあ
り
四階より勤めにいづる人の行きをみてをり窓へだて世をへだつ思ひ
に
ゆるびたる時計のねちを巻きて眠るなほいのちある明日をたのみて
術後の身浮くごとく朝の庭にたつ生きてあぢさゐの花にあひにし

(過去)

たましひのよろこびのごと宵闇の庭にくちなしの花暮れのころ

術後、彼は好んで野歩き、村歩きを行なった。その頃上田は、北多摩清瀬町(当時)に住んでいた。武蔵野の面影をわずかに残した地であった。上田には二人の男の子があったが、夏以降、当時小学一年生だった次男がせがんでついて来た。回顧して言う。

「よく喋る子供だった。喋りながら、手をつないだり、後になつたり、先になつたりして随いてくる腰のあたりまでの小童の影を想像のうち
に甦らせてみると、父親にとつて、このとき野の上にあった二つの影
ほど幸せなものなかつたという気がしてくる。」⁵⁷

四季は速やかに、しかも容赦なく過ぎて行く。「瞬間よとどまれ。」「わが身よ、此処にとどまれ。」それが、野歩き、村歩きの道すがら、口をついて出てくる祈りであった。「止まらぬ時間を止めてでも生きたいと思った」と言う。「後世を信じることのできない私にとって、この世こそすべてであつたのである。その頃の歌を紹介すると、

おぼろ夜とわれはおもひきあたたかきうつしみ抱けばうつしみの香
 や (えこの花)

みづからのにほひも淡くなりたりし手術ののちの吾を思ひ出づ
 病名に触れてくるとき微妙なる反応をいくたびか人のうへに見き
 子の手ひき入日の野路をたどるとき何に涙ぐむころとおもふ

黒棹のはがきがとどき不意にして古き傷みは炙りいだされぬ
(虫眼鏡)

(檸檬一顆)

さて、「たまものとしての四十代」に戻ると、手術して約二年後を次のように回想する。

「生き得た喜びの底に再発のおそれを畳みながら、それでも確実に回復に向かってゆく自分の肉体を自覚するのは頼もしかった。たまもの語が、かりそめならぬ実感として受け取られるようになったのはそのころからだ。そういう生命感が、四季自然の風物の中に融けこんで、一種透明ともおもわれるような韻きを立てはじめたと感じたのは、術後の二年目、昭和四十三年に入ってからであった。それまでの歌は、どこかまだ無力感がつきまとった。その無力感を放念に転じた昭和四十三年の「山塊」の一連は、私にとっては重い意味をもっている。¹³⁾

術後二年がたち、上田にもようやく「生き得た喜び」が感じられるようになった。心の底になお「再発のおそれ」が秘められてはいるが、「肉体」の方は「確実に回復に向かってゆく」のが自覚され、「頼もし」く思われる。この信頼を寄せられた「肉体」は、のちに「内なる自然」と捉えられ、上田に『うつしみ この内なる自然』を書かせることになる。

「山塊」五十首中には次のような作品が見受けられる。

用なくて歩むはたのし雲のごときかの遠山もけふ晴れわたる
 麦刈られたる畦間にはやも生ひいでて陸稲はうすきみどりのそよぐ
 六月のころつつましわがいのちを亡きものとしてかつて嘆きき
 つゆ雲の一角きれて西のかなた茜さすはかなしみの記憶のごとし
 つゆの晴れ間よろこびてゆく市路にはすでに寝蓆草が売られてゐた
 り

これまでの歌につきまといていた「無力感を放念に転じ」、「かなしみ」をもはや過去のものとし、生きている喜びを歌うようになる。上田の病後の大きな転機を示す、その「山塊」一連の初めに、上田は『徒然草』より、「わが生ずるに蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。」(第一百二段)を引いた。再発に際し、限りある時間を大切にしたい、義理の付き合いなどで時間を決して無駄にすまいと心に誓ったのである。回復が確実に感じられて後、上田は兼好を範として生きようと決心する。ガン「再発のおそれを畳みながら」生きて行こうとする上田は、遠く中世の兼好の生き方にこそ最も近いものを覚えたのである。

上田は「ちっとも死後を信じていない。」¹⁴⁾では、いつ再発するかもしれないという状況の下で、彼はどう生きたのか。限られた生、「先途なき生」をいかに生きようとしたのか。しかし、生が限られているのは何も上田ばかりではない。われわれの生も限られている。いつ終わるかも知れぬ生を生きているのである。上田の闘いは、本来われわれもまた闘わねばならない闘いではないか。

筆者も四十代の半ばを迎え、この闘いには切実な関心を持つ。拙論は、『俗と無常―徒然草の世界』に、その跡を探ろうとするものである。本書は昭和五十一年刊で、上田の五十二歳の時に出版された作品であるが(正確には、約一年前、まずいくつかの雑誌に発表されてい

る)、兼好論のモチーフはすでに四十代にでき上がり、四十代後半には、彼の生を支えていたと考えてさしつかえないだろう。

上田は後年、『俗と無常』の「あとがき」、また「『学術文庫』のためのまえがき」で、闘病の頃を回想して次のように言っている。

「十年の昔になるが、私は大病に見舞われていったん生を諦めたことがあった。そして、希有の強運が私をもういちどこの世に連れもどしてくれた」。『徒然草』はそれまでも読んでいたが、その「生死の覚悟」、「生き方の極意」は他人ごとであった。「一度、この世の果てをうかがうような事柄に立ち会って、『徒然草』はようやく私の心に入ってきたと思われた。『徒然草』に惹かれたのは、上田「自身」の深い内面的な要求」からであった。「隠遁への誘惑」があったこともその一つであった。本書にある種の魅力があるとすれば、兼好を単なる知的な理解でなく、「みずからにおける生死の問題に重ねて捉えた」¹⁵⁾からだろう。そう上田が言う時、彼の兼好「解釈」は、『徒然草』というテキストによって限定されてはいるものの、それによって触発され、また形成された上田自身の考えでもあると言っているだろう。

二、兼好の「時間論」

『俗と無常—徒然草の世界』の中心は、上田自身も言うように、第三章「兼好と時間」である。

「兼好と時間」によれば、兼好は「後世者」ではない。ここに上田の兼好理解の根底がある。「後世者」とは、浄土における死後の生活こそが真実の生であるとし、後世での安楽を得るため、現世を否定し、ひたすら念仏を唱えることによって、後世を完全な形で迎え入れようとする者である。他方、兼好はあくまで「此岸の人」、「現世者」(上田の造語—筆者注)であり、後世を頼みにしていない。「死すべ

き、有限の、つまりは無常の人間の荷う時間という難問を、彼岸のたよりという救済の項抜きで解こうとする」¹⁶⁾。言い換えれば、宗教による「救済」とは無関係に、先途なき生をどう生きるかという問題を考えたのである。上田の人生に対する姿勢もまたこれと同様でなければならない。

「老来りて、始めて道を行ぜんと待つことなかれ。古き墳、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病を受けて、忽ちにこの世を去らんとする時にこそ、始めて、過ぎぬる方の誤れる事は知らるなれ。誤りといふは、他の事にあらず。速にすべき事を暖くし、暖くすべき事を急ぎて、過ぎにし事の悔しきなり。その時悔ゆとも、かひあらんや。

人は、たゞ、無常の、身に迫りぬる事を心にひしとかけて、束の間も忘るまじきなり。さらば、なか、この世の濁りも薄く、仏道を勤むる心もまめやかならざらん。」(第四十九段)

この段の主旨は、「道」、つまり仏道の勧めであり、根底には、人は死が身近かに迫っている、常に死に曝されているとの無常観が潜む。そのことをいつも意識し、束の間も忘れてはならないと言う。

しかし、兼好は「後世」については……ほとんど、何事をも語らない¹⁷⁾。「彼の眼は、たえず死を見詰めつつ、死の向こう側の時間に及ぶことはない。」兼好は「後世者」ではない、というのが上田の確信であった。死の到来が近いとの予感、いっそう彼に現世の認識を切実にさせるのである。

「世捨て人」兼好は、確かに出家することによって、世を、現世を捨てた。いや、より正確には、「現世の二次的な部分を捨てること」によって、現世のもっとも本質的な部分のうちにとどまった¹⁸⁾。現世の「二次的な部分」である「諸縁」を放下することにより、現世の「もっと

も本質的な部分」、すなわち「時間」を取り出そうとしたのである。

「人間の儀式、いづれの事か去り難からぬ。世俗の黙し難きに随ひて、これを必ずとせば、願ひも多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は、雑事の小節にさへられて、空しく暮れなん。日暮れ、塗遠し。吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ。礼儀をも思はず。この心をも得ざらん人は、物狂ひとも言へ、うつゝなし、情けなしとも思へ。毀るとも苦しまし。誓むとも聞き入れじ。」（第一百二段）

上田が「山塊」に掲げたのは、この「吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。」であった。自分の人生はうまく行っていない。今こそ「諸縁」を捨てるべき時だ。「諸縁」とは、世間の義理の付き合い、社交的儀礼等、世間とのあらゆる関わりをさす。世間の付き合いにかまけていれば、つまらぬ雑事に追われて、何もせぬうちに人生は終わってしまう。勇気をふりしぼって、世間との関わり合いを断ち切るべき時だ。これこそ上田が再出発にあたって、自らに課した第一の格率であった。

「物皆幻化なり。何事が暫くも住する。」（第九十一段）「如幻の生の中に、何事をかなさん。すべて、所願皆妄想なり。」（第二百四十四段）とあるように、人生を幻とする点では兼好の無常観は後世者と同じだが、兼好はそれに代わる価値を、後世に見出そうとはしない。「彼は否定すべき現世に、否定を心に抱いたまま、とどまるだろう。」²⁰「諸縁」を放下し、「現世の二次的な部分」を身ぐるみ剃いで行く時、兼好は「透明な一本の筒」と化し、そこには「時間だけが詰まっている。」²¹「透明な時間の筒」の、筒とは身体である。とすれば、時間とは兼好の「心そのもの」に他ならない。兼好にとって、現世で幻でな

い実在はこの「時間」のみである。「死によって切断される時間のごく短い線分」²²、言い換えれば後世なき生、先途なき生をどう生きるのか。有限の時間の中に、心の拠り所を見つけることは果たして可能なのか。しかも「死期は序を待たず。」である。

「春暮れて後、夏になり、夏果てて、秋の来るにはあらず。春はやがて夏の気を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は即ち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり、梅も蕾みぬ。木の葉の落つるも、先ず落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌しつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下に設けたる故に、待ちとる序甚だ速し。生・老・病・死の移り来る事、また、これに過ぎたり。四季は、なほ、定まれる序あり。死期は序を待たず。死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の満つるが如し。」（第一百五十五段）

死とは、今は彼方にあるが、いつか必ずやって来るといったものではない。死はいつ何時到来するかもしれないのである。死は不意にわれわれを襲う。「死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。」である。「沖の干潟遙かなれども、磯より潮の満つるが如し。」なのである。

「寸陰惜しむ人なし。これ、よく知れるか、愚かなるか。愚かにして怠る人のために言はば、一錢軽しといへども、これを重ぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の、一錢を惜しむ心、切なり。利那覚えずといへども、これを運びて止まざれば、命を終ふる期、忽ちに至る。」

されば、道人は、遠く日月を惜しむべからず。たゞ今の一念、空し

く過ぐる事を惜しむべし。もし、人來りて、我が命、明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るゝ間、何事をか頼み、何事をか營まん。我等が生ける今日の日、何ぞ、その時節に異ならん。一日のうちに、飲食・便利・睡眠・言語・行歩、止む事を得ずして、多くの時を失ふ。その余りの暇幾ばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事を言ひ、無益の事を思惟して時を移すのみならず、日を消し、月を互りて、一生を送る、尤も愚かなり。」(第百八段)

死を先のことだと思つてはいけない。死は明日かもしれないし、今日のことかもしれない。そう思つて今を、この一瞬を大事に生きなければならぬ。「たゞ今の一念、空しく過ぐる事を惜しむべし。」もし、人がやつて来て、私の命が翌日に必ず失われると告げたなら、その日が暮れるまでの間に、私はいつたい何を期待し、何をするだろうか。今日という日が、どうしてその日と違ふことがあるう。死はいつ何時にやつて来るかもしれないのである。

兼好は先途なき生を、「寸陰愛惜」でもつて処す。「たゞ今の一念」、ごくわずかな時間ですらも惜しんで大切にしようとする。「念々、また念々、時々、また時々、彼はみずからの心をもつてみずからの心を見き込み、みずからの時間をもつてみずからの時間を覗き込む」。上田は「蛇が自分の尾を呑み込むような」行為と喩えているが、それは、「直線的に流れてやまない時間を、瞬間、瞬間において完結させ、凍結させようとする行為」に他ならないのである。

上田が再起するに当たつて、自らに課した第二の格率はこの「寸陰愛惜」であった。「瞬間よとどまれ」、「わが身よ、此処にとどまれ」といった、野歩き、村歩きでの祈りの言葉に端的に表れているように、術後、いつ再発するかもしれぬとの恐れを抱いていた上田の願ひは、時間の流れを塞ぎ止めることであつた。それが不可能ならば、流れを

できる限り暖やかにすることであつた。その手段が「寸陰愛惜」である。先途なき生を運命づけられた人間には、それへの抵抗として、死までの限りある時間をば何らかの仕方で見引き伸ばそうとする以外、どのような方法があるだろう。

兼好における時間とは、図式化するとこういうものであつた。

蛇の喩えからもわかるように、この時間は「瞬間という時間の微小線分が円環をなしつつそれが鎖状になつて」いるのであるが、「円環はみなその一端を開いて連続し、螺旋をなし、その螺旋がじつに緻密であるために円環の重なりと見えるような、そういう時間」である。

「その流れの形は、外観においては直線的な時間の流れと同じ長さであるが、しかし兼好の意識においては、たとえば、その螺旋に巻く有限の時間の両端を持って引張れば、それは、有限の中にほとんど無限の時間を巻き取めているのを明らかにするような長さとして、存在する。」

上田が『俗と無常—徒然草の世界』の中で最も熱っぽく語るのはこのあたりである。必死になつて自らを説得しているような感じを受け、それだけに言い回しが難解である。それが魅力になっているとも言えるが、筆者の理解が届かないところもある。

さて、兼好はこういう「時間の構造」を手に入れ、そこに「彼の心術の中心」を置いていた。この「時間の構造」ゆえに、兼好は「寸陰愛惜」の張り詰めた中でも、心の柔軟さを失わない。

「両端を持って引張れば、それは、有限の中にとんと無限の時間を巻き取っている」ばかりではない。上田は先の「円環」は「円環」であるがゆえに、「四季的自然的回帰的時間」に照応すると言ふ。

「死すべき、有限の、線分的時間は、その極微の形態を瞬間に見いだすところから、ふたたび、照応による回帰的時間への通路が生じて、氷結にまでわが心を追いつめていった兼好の時間に、ある和らぎが遺つ

てくる。」その和らぎの表現が、「しばらく楽しむ」なのである。

「未だまことの道を知らずとも、縁を離れて身を閑かにし、事にあづからずして心を安くせんこそ、しばらく楽しむとも言いつべけれ。

『生活・人事・伎能・学問等の諸縁を止めよ』とこそ、摩訶止観にも侍れ。」（第七十五段）

「所願を成じて後、暇ありて道に向はんとせば、所願尽くべからず。如幻の生の中に、何事をかなさん。すべて、所願皆妄想なり。所願心に来たらば、妄心迷乱すと知りて、一事をもなすべからず。直に万事を放下して道に向ふ時、障りなく、所作なくて、心身永く閑かなり。」（第二百四十一段）

兼好の心術の目指すところはこの「心身永閑」であった。身も心もともに長く安静でいられること。身における「諸縁放下」と、心における「寸陰愛惜」の両者の上になるこの「心身永閑」の境地こそ、兼好の「生き方の極意」であった。そう上田は解釈する。この兼好の「生き方の極意」はまた同時に、上田の希求する生き方であったにちがいない。

三、「うつしみ この内なる自然」へ

昭和四十八年、術後七年目、上田は「大方病気を忘れるまでになつていた」が、四月、「便の異常」を見、再び癌研究所附属病院にて精密検査を受けることになる。

「この七年目の騒動はさいわい大事にいたらずに済んだが、病氣以来、私の胸に宿っていた無常の思いを濃くしたことは否めない。一つの決意が生まれようとしていた。一口に言って、それは隠遁の志といった

ものである。私はあくせくすることなしに生きたいと思った。私が命拾いをしてよりのちの歳月を余生と思ひ定めたのはそのとおりだとしても、元氣をとり戻してからの生活は、いつしかもとの煩雑な生活への復帰であり、煩雑の度合いは年とともに加わっていた。私は五十歳になろうとしていた。五十という男の年齢が、普通に世に処して行くのにどんな多忙を強いられるか、若い時には思ってもみなかった。そこには閑暇とは逆の、いくら振り払っても払い切れない雑事というものが押し寄せてきていた。ありていに言えば、私は医者をやめたいと、そのことばかりを思うようになっていたのである。」

この「騒動」により、兼好のあの「吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。」という言葉が、以前にも増して切実に響いてきた。「ほとんど、おびやかしをもって迫ったと言っている。」上田はついに医者をやめる決心を固める。「隠遁の志は定まった。」と言う。翌年七月まで延びることになったが、五十一歳の誕生日後まもなく、十二年間勤めた国立東京病院を退職するのである。

上田が「兼好の隠棲は、このような内部の時間を覗き込むためのものであり、その前提としての条件づくりだった。」と言う時、上田の意図したことは明らかであった。その年の暮に、退職金をもとにして庭に「小屋」を建てた。「優游居」と名付けられた、上田自身の「草庵」であった。そして、ここでの最初の仕事は、『俗と無常―徒然草の世界』だったのである。

「優游」とは、辞書に「暇があつてのどかなるさま」とあり、「永閑」に通じている。この語は良寛の詩の一節「優游 又 優游 薄か言に今晨を永うす」から取られたのだが、上田はこれを「良寛の出家の心情をいうのにもっとも相応しいもの」と考えていた。また、この庵は、北宋の詩人、蘇軾の「無事 此に静座すれば 一日は兩日に似たり」から取って、「一日兩日庵」とも名付けられた。ここにも上田の希求

したものがよく表れている。

上田は五十年三月刊の歌集『湧井』の「あとがき」で、「この時期、覚悟の重患より癒され、四季自然との一体感のうちに存命のよろこびを歌にしてきた私は、地より湧く清水の生命感に、わが生の祈念するところを見てきたと言っている。」と書いている。「山塊」以後、四十年代の上田を支えてきたのは、兼好より学び取った「時間論」と、「四季自然との一体感のうちに」見出した「存命のよろこび」であった。

『俗と無常―徒然草の世界』の二年余り後、上田は『うつしみ この内なる自然』を書いた。その「あとがき」には、「病気は私に、身体がいかに自然の一部であるかをあらためて実感させた。それが第一章である。第二章以下において、私は身体を外なる自然に対する内なる自然として捉え、その内なる自然を外なる自然につなぐことによって次の三つの問題を解こうとした。すなわち別の身体としてあらわれる他者との和解と、わが身体における精神の正当な位置づけと、そして最後に、内、外の自然を貫く時間の観相とおして得られるべき、内なる自然の無常の克服である。」とある。

今度は身体を中心にし、その身体を「内なる自然」と捉えることによって、先途なき生としての人間の生死の問題を考えようとする。これが上田に課せられた五十代前半の最大のテーマであったろう。四十年代において上田を支えた、兼好の「時間論」と「四季自然との一体」化の「よろこび」の両者に、身体を中心に据えて統一を計ろうとするのである。

拙論での筆者の意図は、上田の最終的な死生観を見定めることではなく、四十二歳の時結腸ガンを患って後、どのような考えに支えられ、どう生きてきたのかを探ることであった。『うつしみ この内なる自然』の主たる議論にはこれ以上立ち入らない。

おわりに

上田は先に引用した『うつしみ この内なる自然』の「あとがき」にも、解こうとする三つの問題の最後に、「内なる自然の無常の克服」を挙げた。上田のテーマは一貫しているのである。兼好の「時間論」のところでも触れたように、「死すべき、有限の、つまりは無常の人間の荷う時間という難問を、彼岸のたよりという救済の項抜きで解くことは可能かということであった。言い換えれば、宗教的立場によらずに、永閑の境地を獲得できるかということである。

上田は兼好を「後世者」ではなく、「現世者」と捉え、その上でその「生き方の極意」を学び取ろうとした。しかし、『うつしみ この内なる自然』において、こう書く。

「先途なき生―その限定された短い時間の中に身を浮べて、閑居の無事という立場が自己救済の役を果すことが出来るとすれば、あるいは救済とまではいわぬにしてもすくなくとも自己慰撫の役を果すとすれば、それは宗教的なものではなく心理的なものであるはかはないだろう。」³³⁾

上田が『徒然草』から学び取ったものの、彼が兼好の「生き方の極意」と呼んだものは、「心理的なものであるはかはない」と、「自己慰撫の役を果す」に止まるだろうと言う。このことは、上田が意図したものが挫折に終わったことになるのだろうか。筆者はそうは考えない。

上田は「現世者」に徹することによって、「後世者」を超えようとした。「後世者」は現世における生の意味を否定し、後世における生を夢見、心はすでに浄土に向って飛んでいる。「後世者は本質においてロマンチストである。」³⁴⁾宗教的立場に立つか立たないかよりも、もっと大切なのは、この世をどう生きるかではないのか。上田は後世を信じていなかったが、信じまいとしたのではなく、ただ信じられなかつ

たのである。上田の描く兼好に、後世は「絶たれていないまでも、それは思案の外に置かれて、現世の生を規正する力を持たない。」兼好において、「死後は持みがた⁸⁵」いのである。上田もまたそうであったろう。ただ、上田には、信じられない自分をどうしようという考えはなかった。

上田は「『湧井』の最後において私は五十の坂にさしかかった。恐ろしいほどの、早い日の過ぎゆきであったと思う。」⁸⁶と書く一方で、「稀有にしているのちながらえ、その後の十何年かのあいだに、私は拾いものの人生にしては思いがけないほどの充実した時間に恵まれた⁸⁷」とも書いている。両者に矛盾はないだろう。

「思いがけないほどの充実した時間」の例を一つ挙げよう。上田は昭和四十四年、吉野に旧友前登志夫を訪ね、花を楽しんだ。病気をして以来初めての旅と言っている。死は未だ片時も念頭を離れなかったであろう。病より三年、「山塊」を発表してから一年後のことであった。代表作「花信」はそこで生まれたのである。

さびしさに耐へつつわれの来しゆゑに満山明るこの花ふぶき
 中千本上千本の花のふぶきひとつまぼろしを伴ひゆけば
 ちる花はかずかぎりなしことごとく光をひきて谷にゆくかも
 吉野山花どきおそき夕まぐれここに葬るべきころひとつ
 ちりみだるる夕山桜いひがたき未練は花のしたかげあゆむ

前は上田がガンの手術を受けたことを知らなかった。上田の死後その時のことを回想し、「あのときの上田君は本当に淋しそうだった。ものをいうのも煩わしいような風で、花に魂をうばわれた風情だった。この誠実な歌びとに何か悲しいことがあるのだなということを感じていた。」⁸⁸と書いているが、興味深い。

昭和五十九年七月、上田は六十一歳の誕生日の直前、前立腺腫瘍にて癌研究所附属病院泌尿器科に入院。その後、入院を繰り返して治療に努めるも、平成元年一月八日、昭和の終わった翌日、帰らぬ人となった。病名前立腺癌肺転移。享年六十五歳であった。

最晩年の作品の中には、辞世とも言うべき次のような歌もある。

くるしみの身の洞いでてやすらへと神の言葉もきこゆべくなりぬ
 (つゆじも)

五十代以降の死生観の深まりについては稿を改めたい。

注

(1) 「奈良大学紀要」第二十二号(平成六年)十一～二十五頁

(2) 後に、『上田三四二全歌集』(短歌研究社、平成二年)に収められる。

拙論はこれによる。

(3) 後に、『短歌一生』(講談社学術文庫、一九八七年)に収められる。

(4) 『短歌一生』一九二～一九三頁

(5) 同書、一九三頁

(6) 『うつしみ この内なる自然』(平凡社ライブラリー、一九九四年)、

六一頁

(7) 同書、六五頁

(8) 同書、七五頁

(9) 同書、六八頁

(10) 『短歌一生』、二三四頁

(11) 同書、一九六～一九七頁

(12) 神谷美恵子は『生きがいについて』(みすず書房、一九八〇年)の中で、

一度「生きがい」をなくした者が、絶望の淵から這い上がるにあたって、きわめて重要な働きをするのは「肉体」であると言っている。「生きがい」をうしなつた人間が死にたいと思うとき、一ばん邪魔に感じるのは自己の肉体であった。しかし実際はこの肉体こそ本人の知らぬ間にはたらいで、彼を支えてくれるものなのである。」(一三八頁) 上田においても、この時の、「確実に回復に向かつてゆく自分の肉体」に対する感動は、決して軽いものではなかった。ただ、上田の場合、そこに神や仏の力ではなく、自然のみを認めたのである。

(13) 『短歌一生』、二一五頁

(14) 一九八六年、講談社学術文庫に収められるにあたり、『徒然草を読む』に改題される。同書、二二三～二四頁。なお、『徒然草』の解釈にあたっては、『徒然草』全訳注(三木紀人著、講談社学術文庫、一九八二年)を参照させていただいた。

(15) 同書、三～五頁

(16) 同書、二二四頁

(17) 同書、八九頁

(18) 同書、九〇頁

(19) 同書、九一頁

(20) 同書、九三～九四頁

(21) 同書、九四頁

(22) 同書、九三頁

(23) 同書、一〇七頁

(24) 同書、一一一頁

(25) 同書、一一〇頁

(26) 『うつしみ この内なる自然』、一八八～一八九頁

(27) 同書、一九〇頁

(28) 同書、一九二頁

(29) 同書、二〇三頁

(30) 同書、一九四～一九五頁

(31) 『上田三四二全歌集』、二二二頁

ここで、拙論に関連のある範囲で、上田の年譜を示しておこう。

昭和四十一年(四十三歳)、五月、結腸癌のため入院。六月、手術、月末退院。

退院。

四十三年(四十五歳)、「山塊」を発表。

四十四年(四十六歳)、「花信」を発表。

四十八年(五十歳)、四月、下血があり、精密検査を受ける。五月末まで欠勤。六月、復職。

末まで欠勤。六月、復職。

四十九年(五十一歳)、七月、国立東京病院を退職。

五十年(五十二歳)、三月、歌集『湧井』刊行。

五十一年(五十三歳)、『俗と無常—徒然草の世界』(講談社、のち講談社学術文庫)刊行。

講談社学術文庫)刊行。

五十三年(五十五歳)、『うつしみ この内なる自然』(平凡社、のち平凡社ライブラリー)刊行。

ち平凡社ライブラリー)刊行。

五十九年(六十一歳)、七月、前立腺腫瘍のため入院。八月、手術。

十月退院。

平成 元年、

昭和の終わった翌日逝去。病名前立腺癌肺転移。享年六十五歳。

(ただし、年齢はその年の誕生日後の年齢を示す。上田の誕生日は七月二十一日。)

(32) 『うつしみ この内なる自然』、二三八～三三九頁

(33) 同書、一九八～一九九頁

(34) 『徒然草を読む』、八七頁

(35) 同書、四五頁

(36) 『短歌一生』、二〇九頁

(37) 同書、二二八頁

(38) 雑誌『歌壇』平成元年四月号（本阿弥書店）、二六頁

“L’*époque quadragénaire* comme don” de Miyoji UEDA,
poète de *tankas*

Isao OMACHI

Résumé

Miyoji UEDA était médecin et un des poètes les plus célèbres après la dernière guerre. Quand il avait quarante-deux ans, il a souffert d’un cancer du côlon. C’était en la quarante et unième année de Showa (1966), et le cancer signifiait, à cette époque, la mort dans un proche avenir. Il s’est donc préparé à la mort, mais l’opération a réussi et heureusement il a pu vivre longtemps. Comme le titre de son essai le montre, il a eu le don, autrement dit la chance, de pouvoir vivre quadragénaire malgré le risque d’un cancer.

Mais le cancer pouvait toujours récidiver. Sous cette peur, comment essayait-il de vivre? Ce qui lui a donné l’espoir de la vie, c’est la théorie du temps chez Kenko YOSHIDA, auteur de “*Tsurezuregusa*”, et son inclination pour la nature. En examinant chez UEDA “La mondanité et la mutabilité—le monde de *Tsurezuregusa*”, “Le corps vivant—cette nature interne”, “Le puits jaillissant”, son recueil de *tankas*, etc., j’ai considéré sa conception de la vie et de la mort à l’époque quadragénaire.